

2021年9月11日

乗木養一

4年A漢字

# 特の字誌

P. 2	精選案	当初からのA漢字である。
P. 3	配当学年	1989年の改訂で5年から4年配当に。4年が適当かどうか。
P. 4	使用状況	どの調査とも出現例は100位～200位台。
P. 5	習得状況	読みは95%だが、書きはやや定着しづらい。
P. 6	音訓	音のみである。
P. 7	字形	「牛+寺」で組み立てられており、構成はわかりやすい。しかし、まぎらわしい類似字形が多い。
P.12	字源説	原義が《ひときわ大きなオスウシ》とみる点で諸説は一致する。
P.17	字義	核となる意味は《ほかとはまったく異なっている》
P.18		同音の「得」「徳」と、とりちがえるおそれがある。
	語イ	副詞の「とくに」はかな表記で十分通じる。 造語力のある字である。「特」に《とくべつな》などの意味をになわせた2字語が多くつかわれている。

(別ファイル「特 語イ表」「特 語釈・文例集」参照)

## 1. 漢字表と精選案

### 1. 国字研精選案における「特」の位置づけ

「特」は、1946年告示の「当用漢字表」（1850字）にかかげられました。また義務教育9年間の学習対象をしめした1948年「当用漢字別表」（教育漢字表、881字）にもふくまれました。1947年『文部省著作国語教科書』第6期国定読本（いいこ読本）では6年用にのりでしたが、1958年の小学校学習指導要領に学年別配当表がしめされるようになると、そこでは5年配当となりました。

	1978年8月	「小学校600漢字」にふくめる。(大久保忠利第1次私案)
	1978年12月	「小学校758漢字」にふくめる。(見城慶和・関可明修正案)
	1984年4月	「小学校600漢字」にふくめる。(小学校第1次素案)
	1987年8月	「 <b>小学校で書けるようにする漢字</b> 」に「特」を採用。 (日野見言研案をもとにした小学校第2次素案)
旧精選案	1988年8月	「 <b>小学校で書けるようにする漢字</b> ・614字」に選択(小学校第3次素案)
	1990年8月	「試案 小学校・中学校・高等学校教育漢字精選案」で「特」を「 <b>小学校で書けるようにする漢字</b> ・614字」と位置づける。
	2009年8月	「 <b>A漢字</b> —読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2009年改訂精選案)
	2010年5月	「 <b>A漢字</b> —読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2010年補正精選案)
現行精選案	2017年3月	「 <b>A漢字</b> —読み書き漢字。読み書き両方の力を定着させる・608字」に分類 (2017年学習指導要領改訂に対応の精選案)

1978年から1987年までの国字研精選は5年配当当時のものです。

1989年3月の小学校学習指導要領の改訂で、「特」は4年にうつされました。国字研は、1990年8月5日『漢字教育の基本提案』を刊行し、「試案 小学校・中学校・高等学校教育漢字精選案」を掲載し、4年配当となった「特」をあらためて「小学校で書けるようにする漢字」と位置づけました。

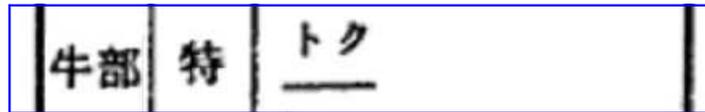
それから20年後の2009年に国字研は、「第3次素案」を改定し、「2009年改定(2010年補正)教育漢字精選案」を公表しました。2009年改定は、紺屋富夫を中心に、ほぼ2年にわたり月例会で一字一字検討し、国字研の複数の事務局員の試案をまじえながらまとめたものです。

精選の観点に「使用頻度、機能性(漢字語形成力)、必要性(学習や日常生活に必要であるか)が高いか」、学校教育において「適切な時間配分で指導できる漢字数か」(読みとり、作文、文法などの指導時間が確保できるか)をたてて、実際の漢字指導に生かすことができる「精選案」をめざしました。

さらに現行精選案は、2017年学習指導要領改訂に対応したもので、それをもとに「1セット5過程」の実践をすすめています。

2. 漢字表

- (1) 当用漢字表 (1946年11月16日, 1850字)
- (2) 当用漢字別表 (「教育漢字」1948年2月16日, 881字)  
ふくまれた。
- (3) 当用漢字音訓表 (1948年2月16日) 下図↓



- (4) 当用漢字字体表 (1949年4月28日)

右図→



- (5) 当用漢字改定音訓表 (1973年6月18日)  
トク (変更なし)
- (6) 常用漢字表 (1981年10月1日) ↓

特	トク	特殊, 特産, 独特
---	----	------------



3. 小学校学習指導要領の配当学年の推移

告示	実施・使用開始	学習指導要領・教科書		教育漢字数
	1947年4月	学習指導要領(試案)	[注1] 6年	684
	1951年4月	小学校学習指導要領(試案)	[注2]	881
1958年	1961年4月	小学校学習指導要領	5年	881
1968年	1971年4月	小学校学習指導要領	5年	996
1977年	1980年4月	小学校学習指導要領	5年	996
1989年	1992年4月	小学校学習指導要領	4年	1006
1998年	2002年4月	小学校学習指導要領	4年	1006
2008年	2011年4月	小学校学習指導要領	4年	1006
2017年	2020年4月	小学校学習指導要領	4年	1026

[注1] 1947年『文部省著作国語教科書』第6期国定読本(いいこ読本)の提出学年と教育漢字数である。

[注2] 「881字」は、義務教育期間中の指導字数である。「特」もふくまれていた。

4. 音訓の学校段階別わりふり (2017年3月31日 文部科学省)

トク (小学校)
----------

## 2. 出現頻度と習得状況

### 1. 使用状況

(1) 「現代新聞の漢字」 国立国語研究所 1976年

1966年1月1日付け～1966年12月31日付けの「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」3紙の朝夕刊全紙面につかわれた漢字を異なり字種ごとにまとめ、順位づけている。

それによると「特」は、つぎのような順位となっている。

全体順位 155位, 全体資料率 1.523%

層内順位 政治167位, 社会298位, 経済219位,  
文化家庭214位, 運動芸能254位, 広告40位)

用語例

155 特\* 1510

トク 【1510/57】

㊦ 特に93

㊧ 特異 特織(～綸子) 特価50 特技 特級 特許31  
特惠(～関税) 特権17 特攻(～隊) 特効(～薬) 特産

特使20 特質13 特写 特赦 特殊57 特需20 特  
集164 特賞 特色30 特漉(～上質紙) 特性 特製  
16 特設22 特選(特撰・特薦)37 特大15 特ダネ  
特徴(特長18)83 特定31 特典 特等 特派201  
特売11 特筆 特別350 特報 特命(～全権大使) 特  
約12 特有18 特例15 / 独特[独得]34

㊨ 特(特別) / 特会(特別会計) 特急56 特高(旧特別  
高等警察) 特撮 特出(特別出演) 特捜17(～本部・特別捜  
査) 特電(ライター～) 特販(特別販売) 特ハン(競馬・特  
別ハンデ) 特融(特別融資) 特郵連(特定郵便局長連合会)  
特連(総理府～局) 日特金(社名) 日特塗(社名)

(2) 「漢字出現頻度表」2008年 文化審議会国語分科会

基本資料順位 225 位。教科書での出現例は 220 位。  
新聞での出現例は 220 ～ 250 位台。

漢字出現頻度表 順位対照表(Ver.1.3)

凸版(3)順位	漢字	種類	表外漢字 字体表	新聞調査 (朝日)	新聞調査 (読売)	ウェブ データA	凸版(3) 第2部
223	元	常用		163	159	204	212
224	権	常用		154	155	522	39
225	特	常用		259	228	194	220
226	義	常用		361	384	639	87
227	父	常用		661	539	578	624

2010年常用漢字表改定  
のときに、文化審議会が改定  
作業に使った資料。審議で  
は、一般の書物である「凸  
版(3)」調査を基本資料と  
し、他の調査を補助資料と  
位置づけた。

凸版(3)順位	2004年から2006年までに凸版印刷が製作した864冊分の組版データ
新聞調査(朝日)	2006年10月1日から11月30日の期間の朝日新聞の紙面データ
新聞調査(読売)	2006年10月1日から11月30日の期間の読売新聞の紙面データ
ウェブデータA	2007年2月, 4月, 6月のウェブサイトのデータ
凸版(3)第2部	凸版(3)調査のうち教科書だけのデータ

(2008年5月12日 文化審議会国語分科会漢字小委員会)

2. 習得状況

「特別」の読みは1年後には95%をこえている。  
書きは6年生の段階で7割前後。書きがやや定着しづらいことがわかる。

(1) 1964年 - 1969年 文化庁調査

小学校5年に学年配当されていたときの調査。

調査問題「特に」読み95%, 書き71% (調査対象：小学校6年生)

文化庁国語シリーズ『児童・生徒の読み書きのカー当用漢字について』(1972年)

(2) 1982年 - 1984年「国立国語研究所調査」(東京都の集計)

小学校5年に学年配当されていたときの調査。

	音訓	調査問題	1年下	到達度	1年上	2年上	4年上
読み	トク	特別	83.0	98.5	99.0	100.0	98.5
書き	トク	特別な場合	14.0	69.0	69.0	73.0	84.0

調査実施時期：1年下(小学4年11月), 到達度(小学6年4月),  
1年上(小学6年11月), 2年上(中学1年11月), 4年上(中学3年11月)

### 3. 読みかた・音と訓

同音の「得」「徳」と，とりちがえる傾向がある。

#### 1. 音訓

特	トク	Ⓐ ㊦	特に，特別，特ちょう，特急列車
---	----	-----	-----------------

Ⓐ 「当用漢字音訓表」(1948年)に収録された音訓。

㊦ 「常用漢字表」掲載の音訓。

赤字「国字研プリント」の文に掲出のコトバ。

#### 2. 小学校国語教科書における音訓の提出学年(2020年版)

	光村 教出 東書 学図
トク	4年 4年 4年 4年

#### 4年教科書本文の語

[光村図書]	[教育出版]	[東京書籍]	[学校図書]
特別な言葉	特に見てほしい部分	特製のお弁当	特別な読み方

#### 3. 同音の漢字

トク	読②，徳④，得⑤，匿㊦，督㊦，篤㊦
と - く	説く④，解く⑤，溶く㊦

○数字：配当学年，㊦：教育漢字外の常用漢字

\* 2017年の小学校学習指導要領の改訂における学年配当の移動

「徳」⑤→④ 4年で「徳島」を学ぶことから。

「得」④→⑤ 4年配当漢字が多くなることからの字数調整のため。

\* 「読」②[トク]は，小学校にわりふられているが，教科書によっては，「よみかえ漢字」のあつかいとし，後学年に配当しているものがある。東京書籍2020年版は，「六」[む]，外[ほか]とともに読[トク]は6年間でまったく提出しないことにした。

※「得」と「特」のちがい (→P. 18)

#### 4. 書きかた・字体と字形

「牛＋寺」で組み立てられており，構成はわかりやすい。

##### 1. 字体

特  
特  
(現行字体)

学年別漢字配当表

常用漢字表体

特  
特

康熙字典  
(1716年)

楷書 顔真卿  
(709年 - 785年 唐代)

現行字体と康熙字典体に，字体のちがいが無い。

##### 2. 部首・偏旁冠脚

###### (1) 部首

説文解字	牛部 [ギユウ部]
康熙字典	牛部 [ギユウ部]
当用漢字表	牛部 [ギユウ部]
長沢規矩也	牛部 [ギユウ部]

長沢規矩也の部首法については，2019年5月例会資料「戦後の文字改革とおすすめした〈部首〉のみなおし」を参照。

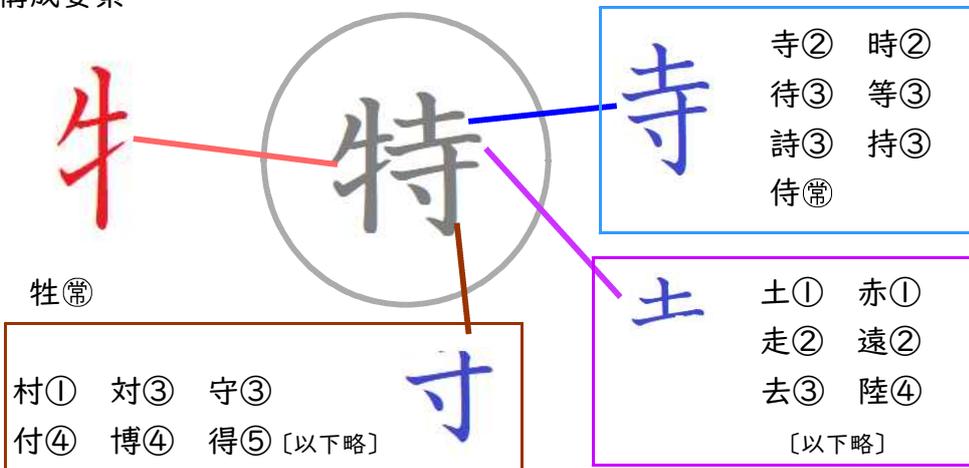
###### (2) 偏旁冠脚

部首 (牛部) 牛 特 寺 音符 [シ] → [トク]

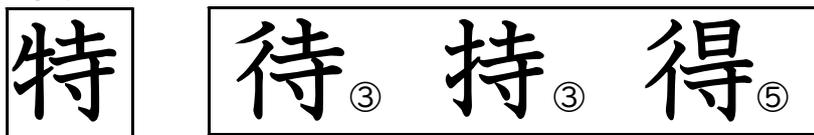
(呼称) うし・うしへん

##### 3. 字形の構成要素

- 牛②
- 物③
- 牧④
- 件⑤
- 解⑤
- 犧⑤ 牲⑤



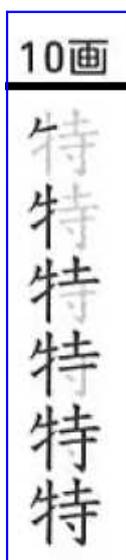
4. 類似字形



5. 楷書の画数と標準的な筆順，さまざまな字形



小学校学習指導要領は、「漢字の指導においては、**学年別漢字配当表に示す漢字の字体**を標準とすること」としている。



行書  
(王羲之, 4世紀)

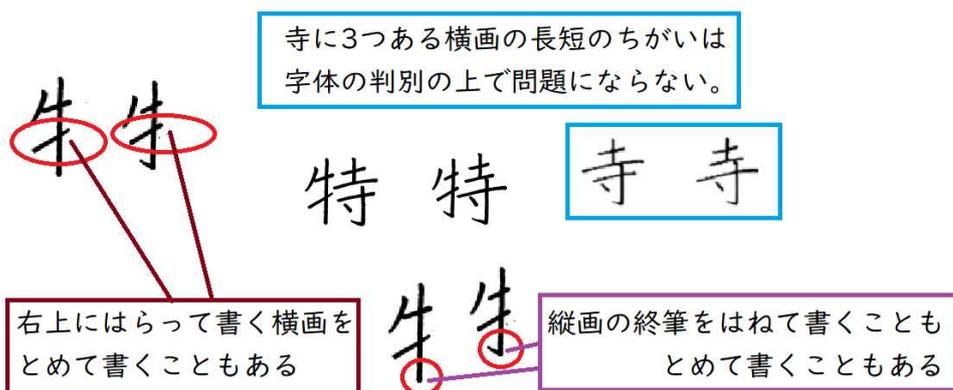


小学校硬筆例

印刷文字の字形の例				
明朝体	ゴシック体	ユニバーサル デザインフォント	UDデジタル 教科書体NR	教科書体
特	特	特	特	特
手書き文字の字形の例				
特 特				

『常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）』  
文化審議会国語分科会（2016年2月29日）を一部改編

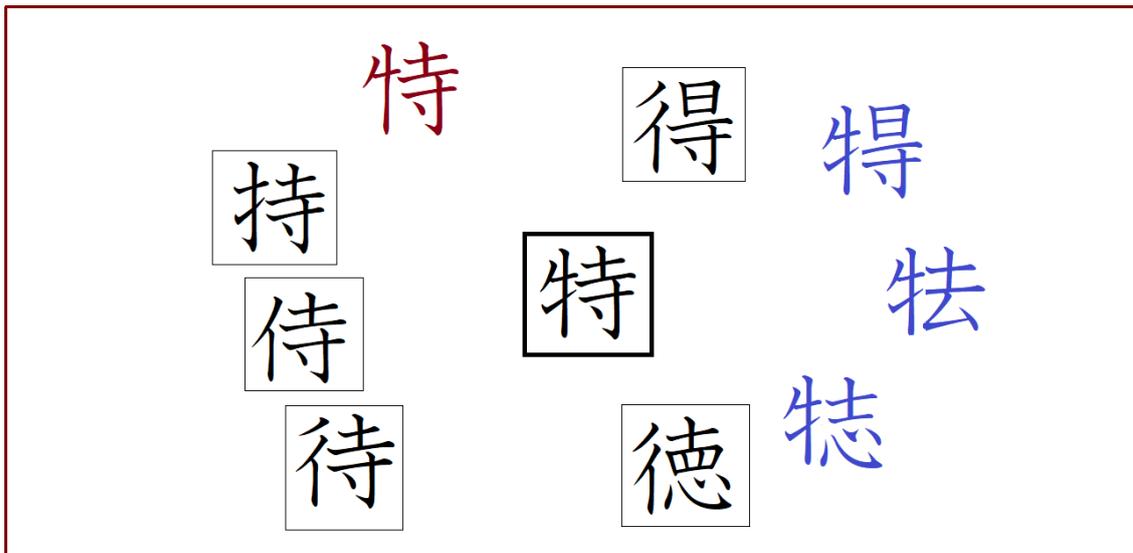
6. 字体の正誤についての評価における許容例



「土」と「土」は、単独で用いられるときには、横画の長短がしっかり書き分けられますが、「寺」など、漢字の一部になっているものについては、「土」と「土」が入れ替わったような形で書かれることがあります。そのような習慣を持つ漢字については、別の漢字に見間違えられることがないので、誤りであるとまで断じることはできないでしょう。

(Q 44 「土」と「土」を構成要素として持つ漢字 『常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）』)

7. 誤字例



8. 口唱法

(1) 下村式 (うしへんに てら)

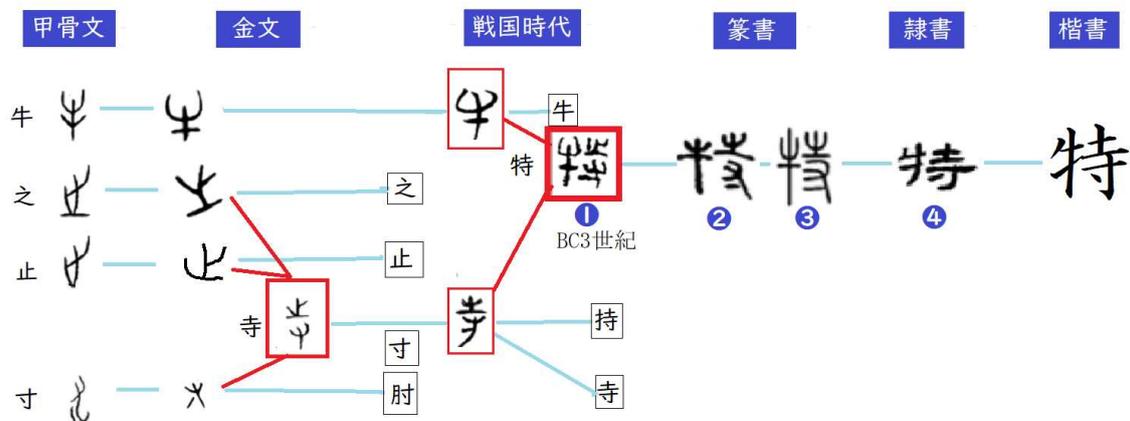
ノ [の] 一 [いち] で | [たてぼう] ✓ もちあげて  
よこに土 [つち] と 寸 [すん] をかく

(2) 自由自在式 (ノ + 持)

この家ノ [の] 持ち物 特別公開だ

## 5. 字体の変転と字源説

### 1. 字体の変転



「特」は、「牛」と「寺」からなる字ですが、篆書以前は見つかっていません。紀元前3世紀の戦国時代・秦の時代の①がいちばん古い例です。

①②③は篆書の字体です。へんが「牛」で、つくりの部分の上部は「止」下部は「寸」から構成されています。④隸書になる過程で「止」が「土」に変化します（隸変）。ほぼ楷書に近い字体となっています。

「牛」は甲骨文の時代からあります。《ツノのあるウシの頭のかたち》にかたどってつくられた象形文字です。「牧」「物」「牝」「牡」「牲」「牢」なども甲骨文からあります。

「寺」[シ]は「持」の原字で《手にとどめ持つ》という意味をあらわしました。紀元前8世紀ごろの周代のおわりごろに、「寸」と「止」とをあわせてできました。金文にみられます。なお「止」の部分を「之」ととらえる説もあります。

「寸」は「肘」の原字で甲骨文のときは《人体のひじの部分をしめす》指事文字でした。

「止」[シ]は《足》をかたどったもので、5本の指が3本に簡略化されています。《歩行》を意味し、のちに《やめる》《とまる》の意味でもちいられるようになりました。

「之」[シ]は《あしあと》をかたどったもので甲骨文では「止」の下部に横線がつく字形でした。《ゆく》という意味をもちました。「しんによう」のもとの字です。

①（石刻）は、唐の時代に陝西省宝鶏県で発見された秦代の太鼓ににた形の石碑の石面にきざまれている文字（石鼓文）のひとつのようです。石碑には BC3世紀に文字統一する以前の秦の時代の篆書（大篆）に近い文字が刻まれています。

「𠂔其特其來𠂔」（「石鼓文」第一鼓：車工・吾車篇）

②（銅刻）は、後漢の光和二年（179年）につくられたという銅製の計量器にきざまれている銘文のなかの漢字のひとつです。

③（紙・毛筆）は、後漢の時代にあまれた『説文解字』（100年）に掲載されている「特」です。②も③も秦の始皇帝の文字統一によりつくられた篆書（小篆）によるものです。

④（木簡・毛筆）は、1959年に発見された甘肅省武威県磨嘴子〔ましし〕6号墓出土の木簡のひとつにある字。「特性」《とくに選んだ一匹のいけにえの牛》とあります。墓そのものは、紀元前後のころ、前漢の末期のものともみられます。おさめられた木簡は、前漢の諸制度の整備期のころともみられるので、それよりさかのぼるBC2世紀～BC1世紀の可能性ががあります。

②③④は、BC2世紀からAD2世紀にかけての前漢と後漢のときものです。この時代は篆書から隷書への過渡期であり、それぞれの製作の比定年代は④→③→②の順とみられますが、図では字体の変転傾向にそって「篆書→隷書」の順にならべました。

## 2. さまざまな楷書

特 特 特 特

褚遂良  
ちよすいりょう  
7世紀唐代初期

蔡襄  
さいじょう  
11世紀北宋

趙孟頫  
ちようもうふ  
14世紀元代

台湾  
常用国字  
現代

## 3. 各国の常用字体の比較

日本	中国	台湾	香港	韓国
特	特	特	特	特
7279	7279	7279	7279	7279

日本「常用漢字表」、中国「通用規範漢字表」、  
台湾「常用国字」、香港「常用字字形表」、韓国「漢文教育用基礎漢字」

※安岡孝一・安岡素子『日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード』（京都大学人文科学研究所，2017年）をもとに構成した。

## 2. 字源について

原義が《ひときわ大きなオスウシ》とみる点で諸説は一致します。

A [阿辻哲次] 形声文字。「牛」と音符「寺」[シ→ジ] とから成る。ひときわ大きな「おうし」。ひいて《とりわけ》の意を表す。

\* 「寺＝寸＋音符止シ」説をとる。

B [藤堂明保] 会意兼形声文字。「寺」は、「寸」(て)＋音符シ  (あし) の会意兼形声文字で、待(じっとまつ)－峙ジ(じっとたつ)－直(まっすぐたつ)などと同系。「特」は、「牛＋音符寺」。群れの中でじっと直立して目だつ種牛。とくに、それだけ特出する意を含む。

\* 「寺＝寸＋音符之シ」説をとる。

C [白川静] 形声文字。音符は「寺」[ジ]。『説文解字』に「朴特[ぼくとく]、牛父なり」とあり、大きい牡牛[おすうし]をいう。

\* 「寺＝寸＋音符之シ」説をとる。

D [説文解字] 「朴特，牛父也。从牛寺聲。」

形声文字。去勢していない牛(朴特)、たね牛(牛父)。「牛」から構成され、「寺」が音。

\* 「寺＝寸＋音符之シ」説をとる。

### 小学生向け学習漢字辞典の字源解説

小学館 例解学習漢字辞典	寺ジ(じっとしている)と牛(ウシ)とを合わせた字。たくさんのウシのおれの中で、一ぴきだけじっと立っていて、とくに目だつウシのこと。
学研プラス 新レインボー 小学漢字辞典	寺ジ(じっと止まる)と牛(＝牛)を合わせた字。おれの中でじっと立っている種牛[たねうし]のように、ほかからとびぬけて目立つことをあらわした。
光村教育図書 小学新漢字辞典	「牛(牛)」と「寺(じっと立っている)」とを組み合わせた字。おれの中で、ほかの牛とはちがって、一頭だけじっと立っている牛のこと。そこから「そのものだけ」の意味を表す。
三省堂 例解小学漢字辞典	形声文字。寺シが「トク」とかわって読み方をしめしている。牛がついて、りっぱなおすの牛を表していた字。
ベネッセ チャレンジ 小学漢字辞典	形声文字。牛(うし)と寺ジ→トク(じっとしている)を合わせた字。たくさんの牛のなかで、うごかなくて目だつ牛のことから、「とりわけ」という意味を表す。
旺文社 小学漢字新辞典	形声文字。意味を示す牛(＝牛)と、音を示す「寺」(シ→トク)を合わせた字。おすの牛のこと。「特別」の意味を用いるのは字を借りたもの。
三省堂 小学漢和辞典 (長沢規矩也)	「特」にはふれていない。「牛」と「寺」のなりたちはそれぞれ解説しているが、「特」となるとおそらく説明に飛躍が生じることから、はぶいたものとみられる。

### 3. 「寺」に意味があるかどうか

「特」を（意符）牛＋（音符）寺で構成されているのは各説とも一致しますが、音符の「寺」に意味があるかどうかでわかれます。

#### 「寺」は音をあらわすだけで意味をもたない

前ページの ACD は、音 [シ] をあらわすだけのものとみます。

ウシはウシでもどのようなウシなのか、音符をつけて区別したとみるわけです。

「犧」（牛＋音符羲キ）神にささげるまじりけのない毛色のウシ（篆書）

「牲」（牛＋音符全セン）神にささげる毛が一色のウシ（篆書）

「牲」（牛＋音符生セイ）神にささげるいけにえのウシ（甲骨文）

「物」（牛＋音符勿ブツ）雑色の毛のウシ（甲骨文）

「牝」（牛＋音符ヒヒ）メスのウシ（甲骨文）

「牡」（牛とオスの性器をかたどる象形文字ボ）オスのウシ（甲骨文）

「特」（牛＋音符寺シ）ひときわ大きなオスのウシ（篆書）

#### 「寺」は音とともに意味もあらわす

B の藤堂明保が提唱する形声音符にも意味をもつという音義説（右文説）で「寺」は《a 動かす》《b じっと止める》のふたつの意味をもっているとみます。

「寺」（シ→ジ）a 《手足を動かしてはたらく》こと。はたらいてひとびとにサービスする《役所》の意味をあらわす。また、外国から来た僧をこの役所にとめてもてなしたことから《てら》の意味をもつようになった。

「時」（ジ）a 日が動いてすすんでいくことをあらわす。時間がたつこと。

「待」（タイ）a 手足を動かして、あいてをもてなすこと。b また、そこに止まってじっと《まつ》こと。

「等」（トウ）a 竹簡の長さをひとしくするため、手足を動かして竹をけずるしごとをすること。

「侍」（ジ）a 手足を動かして、身分の高い人の世話をすること。

「詩」（シ）b 心のなかの記憶を、ことばにしてとどめたもの。

「持」（ジ）b 手にじっととどめておくこと。

「特」（トク）b 日群れのなかでじっと直立していて、よく目だつウシのこと。それだけがとくに目だつこと。

藤堂明保は「特」 tək を《まっすぐに直立するタネウシ》とみて、単語家族には「直」 dīək（まっすぐに見る）－「植」 dīək（とびらをとめるために立てたまっすぐな棒）－「殖」 dīək（植と同系）－「徳」 tək（まっすぐな心）－「値」 dīæg（植と同系）－「勅」 tīək（コトバでまっすぐにする）などをあげています。

## 6. 意味の変転

### ① 原義 《ひときわ大きな「おうし」》

一群のなかでひときわ目だつオスのウシをさしたと思われます。それは祭祀のそなえものとして選ばれ、また繁殖のためのタネウシにもなりました。

「特牛」[トクギウ] いけにえのために一頭だけとくに選んだオスウシ。

「卿皆見以羔，膳特牛。」(『周礼』秋官司寇)「羔」はコヒツジ。

『国語』楚語下，『史記』五帝本紀，『漢書』外戚伝下などにもみられる。

「特性」[トクセイ] いけにえにもちいる一匹のオスウシ。「特牛」におなじ。

「郊特性，而社稷大牢。」(『礼記』郊特性) (P.11 ④参照)

\* 『礼記』郊特性は、いけにえの品など国家祭祀の手順や理念を記した部分。「郊」は南郊祭とみられる。国都の南の郊外で冬至に行われる天の祭祀。その際のいけにえにオスウシを使うが、「大牢」(ウシ・ブタ・ヒツジの3つのいけにえ)も援助的につかわれたとみられる。

\* 「特」の一字でもって《祭祀のそなえもののウシ》という意味がありましたが、「特」にあたらしい意味が付与されるようになると、「特，牛なり」「特，牲なり」と意味を特定するためにこうした並列の二字語がうまれました。

\* 「いけにえのウシ」は、祭祀や公式の宴会の食用に供されます。その状態や条件のものを「牲」とよび、ただ単に飼育しているものを「畜」と区別したそうです。

(三省堂『漢辞海』)

### ② 『詩経』にみる「特」

中国最古の詩集『詩経』には「特」が5例つかわれています。『詩経』には、詩歌 305 首がおさめられていますが、西周初期 (BC11 世紀) から東周中期 (BC6 世紀) に至る約 500 年間のものと推測されています。現存するものは漢代の学者が暗唱して広め、それをもとに唐代に整理されたものが中心で楷書で伝承しています。近年、楚の木簡 (BC1 世紀ごろ) が発掘されて研究がすすんでいます。語句・語釈・字体のみなおしがはかれる可能性があります。

### 派生義 I 《3, 4 歳の大きなけもの》

ウシにかぎらず成長したオスのウマ・ヒツジ・ブタなどをさすようになった。

【有県特兮】[ゆうけん とっけい] (魏風・伐檀)

「不狩不獵 胡瞻爾庭有縣特兮。」

《狩もせず獵もしないのに、なぜ、あなたがたの庭には大きなけものが並んでいるのか》

\* ウシだけでなくヒツジ・ブタ・ウマなどは財産の象徴だった。

**派生義Ⅱ 《もっともすぐれた人》**

けものだけでなく、ひとにもいうようになった。

【百夫之**特**】[ひゃくふしじ：百夫の**特**なり]（秦風・黄鳥）

「維此奄息、百夫之**特**。」

《奄息 [えんそく] は、百人にも**すぐれた**おかた。》

百夫：多くの男子。黄鳥：ウグイスの一種。

\* 『春秋左氏伝』によると、春秋時代の秦の君主：穆公 [ぼくこう] は逝去するときに「子車氏の三人の息子、**奄息**、仲行、鍼虎を殉死させるよう命令した。この三人は、皆、秦の良臣だった。秦の人々は、彼等を哀れんで、「黄鳥」という賦を作った。」といます。

**派生義Ⅲ 《かけがえのない配偶者》**

かけがえのないひとにもいうようになった。

【求爾新**特**】[きゅうじしんとく]（小雅・祈父之什・我行其野）

「不思舊姻、求爾新**特**。」

《あのかたは私をかえりみず、新しい**つれあい**を求めている。》

【實維我**特**】[じついがとく]（國風・鄘風・柏舟）

「鬢彼兩髦、實維我**特**。」

《垂れ髪のある人こそが、ただひとりの私の**つれあい**だ。》

\* 藤堂明保は「實維我**特**」を「実にこれ我が**特**なり」とよみ、この「**特**」は《ひとり者》《未婚独身の男》と解説する（『漢字語源辞典』学燈社）。揚雄『方言』巻6（前漢末に成立）にある「物無耦曰**特**」[ならぶあいてなきを**特**という]をもとにした説だが、近年の「詩経」柏舟の解釈では、再婚を迫られる未亡人が亡き**つれあい**へのおもいをうたったものとみるのが主流となっているようだ。

**派生義Ⅳ 《とりわけすぐれたもの》**

「すぐれる、ことなる」の意味が定着していく。

【有苑其**特**】[ゆううつきとく]（小雅・祈父之什・正月）

「瞻彼阪田、有苑其**特**。」

《山の斜面の田畑をよく見てください、穀類作物の苗は、**とりわけすぐれて**おり、よく茂ります。》

**③ 古典中国語にみられる「特」**

**派生義Ⅳ** 《とりわけすぐれたもの》の意味をもとに多くの二字漢語がつくられていきました。

### 派生義Ⅴ

《ただひとつの》《ただひとつのもの》≡独

《他のものちがって》《他に例がないさま》《ふつうとちがっている》≡異

【特達】ただひとつとどける。(『礼記』聘義篇：諸侯間で進物をたずさえて訪問や見舞いをするときの礼法のひとつとして、《贈り物をするとき、他の品物を添えず、そのものだけを贈る》という意味のコトバで使用されている。)

【特達】ひとりほかのひとたちよりぬきんでている。(劉義慶『世説新語』第二言語篇 南朝宋5世紀)

【特立】他人にたよらず独立する。「特立独行」世俗に従わず自分の信ずることを守って断固として志をつらぬきとおすこと。(『礼記』儒行)

【特立】とびぬけてそびえたつ。(王延寿「魯靈光殿賦」2世紀、『文選』巻11所収)

【特異】他のものとりわけちがう。(『漢書』楚元王伝、『後漢書』宗室四王三侯列伝)

【特秀】とりわけすぐれる。(『東觀漢記』地理志2-3世紀、『三国志』魏志・嵇康「琴賦」3世紀、劉孝標『弁命論』南朝・梁6世紀)

\*その他【独特】【特異】【孤特】【特峙】【特舟】など。

### 派生義Ⅵ

《ことのほか》《とりわけ》《格別に》《ことに》

【特徴】格別に召しだして優遇する。(「宜蒙特徴，以示四方」『後漢書』郎顛襄楷列伝下)

【特恩】格別なめぐみ。(「竊謂朝廷非常特恩，當以待人臣非常之功。」宋・蘇轍「論梁惟簡除遙郡刺史不當狀」)

【特許】格別のゆるし。(「特許門傳籥，那知箭起蓮。」宋・蘇軾「至真州再和」)

\*その他【特赦】【特典】(格別の恩典・待遇)【特命】など。

### ④ 19世紀後半に日本語の近代のなかで造語された「特」

《Ⅳことにすぐれている》《Ⅴ他とはべつである》《Ⅵことのほか》

### 派生義Ⅶ 《とくべつ》

【特別】『明六雑誌』1874年

【特殊】『萬法精理』巻之九 何禮之 1875年 Particular の訳語

【特質】『哲学字彙』改訂増補版 1884年 Characteristic の訳語

【特性】『哲学字彙』改訂増補版 1884年 Peculiarity の訳語

【特色】『真善美日本人』三宅雪嶺，1891年3月

【特徴】『生物学語彙』岩川友太郎 1891年 Characteristic の訳語

【特長】『如是放語』内田魯庵 1898年

【特定】『東京新報』1889年4月21日

特の変転状況

赤字は，別ファイル「語釈・語例集」に掲載の語。

核となる意味は《ほかとはまったく異なっている》

① (原義)

ひときわおおきなオスのウシ  
特牛 特性

② (派生義)

3, 4歳の大きなけもの

もっともすぐれた人

かけがえのない配偶者

③ (派生義)

**とりわけすぐれたもの**

《ただひとつの》 ≡ 独 独特 特立

《他のものとちがって》 ≡ 異 特異 特秀

《ことのほか》 特許 特徴

④ (基本義)

**ふつうとちがっている**

《とくべつ》

ふつうとちがって区別される

ふつうとちがって区別され，すぐれてとびぬけている

特別 特段 特殊 特有 特大

特徴 特長 特色 特質 特性

特設 特命 特使 特派 特約 特訓 特典 特例

《特定の》 特定 特権 特許 特赦 特集

特効 特効薬 特技 特選 特賞 特等

特製 特注 特配 特産 特価 特売 特急

特筆 特記 特報

参考

\* 2019年11月例会で「得」の授業案づくりをおこなった。

※「得」と「特」のちがい (『たのしく みにつく !! 漢字の力』4年)

得……得する (ソンするの反対) 得点、得意 (うしなうの反対)	× 「特する」
特……特等 (一等より上) 特訓 (特別の訓練)	× 「得に」

同音異義語

とくしつ 特質 得失  
とくてん 特典 得点

※「特」と「得」と「徳」

特 (4年配当)	得 (5年配当)	徳 (4年配当)
ふつうとちがっている すぐれてとびぬけている	もうけがある 手に入れる・わかる	ねだんのわりに よいことがある 「得」をもとにしたあて字
このチョコは、 特売品だ。 (特別に安く売る品) 今朝は特に早く起きた。 君の特技はそろばんだ。	このチョコは、 お買い得品だ。 (客が買って得する品) 朝市に行くと得をする。 君は算数が得意だね。	このチョコは、 徳用品だ。(*) (ねだんのわりに よいことがある品) 早起きは三文の徳。

(\*)「徳用品」は、もともとの表記が「得用品」でした。「徳」は、儒学からうまれた《人格的な高さ》をあらわす字でしたが、日本語では《高い立場にある者からのおめぐみ》や、《人間としてしたがうべききまり》を一方的にきめつけるためのコトバを、つくる漢字となっています。ここであげた「徳」は、同音の「得」をもとにしたあて字としての使いかたで、「徳」ほんらいの意味ではありません。